

高校生の生活習慣と生活満足度に関する 都市・農山村間比較

Comparative Study on Life Style of High School Students between Urban and Rural Areas

大森賢一*・二村正之**・金森詞子***

Ken-ichi OMORI, Masayuki NIMURA and Noriko KANAMORI

I. 序

農山村における人口流出現象を居住者のライフステージとの関連で観察すると、高校卒業時の就職・進学による域外流出の比重が極めて大きいことに気付かされる。特に、島根県では、多くの町村で同一コーホートに属する人口の3分の2以上が高校卒業時に域外に流出してしまうことが報告されている（渡部・藤岡・大森（1993））。

従って、域外流出直前のステージに位置付けられる高校生の「生態」を明らかにすることは、定住対策のための基礎的情報を提供するものとして期待される。そこで、小稿では、対照群として都市に居住する高校生を設定し、農山村に居住する高校生の「生活習慣」と「生活満足度」の特質の析出を試みることにした。

II. 調査対象と調査方法

都市を代表する標本として調査協力が得られた千葉県立A高校の1年生3クラス、都立B高校の1年生2クラス、都立C高校2年生1クラスの生徒を選択した。また、農山村を代表する標本として島根県雲南地区に立地する県立Z高校の全生徒を選択した。なお、A高校は千葉県千葉市、B高校は東京都葛飾区、C高校は同港区に立地している。更に、Z高校の立地する町村は農林水産省統計情報部の「農業地域類型」における「中間農業地域」に属する。

調査は、A高校、B高校及びC高校については1995年9月、Z高校については同年7月に行われ、ホームルーム等の時間を利用して自記式の質問紙を配布し、その場で回答して貰った。小稿に関連する設問は以下の通りであるが、整理・分析の都合上、実際の設問と若干表現を変えてある。なお、質問紙の設計には、山根ほか（1994）を参考にした。また、選択カテゴリーも幾つか統合を行い、すべての設問についてYes-Noの二値選択に変換している。

* 島根大学生物資源科学部地域開発科学科
Shimane University, Matsue, 690 Japan

** 島根県立邑智高等学校

*** 島根県立三刀屋高等学校

(生活習慣について)

Q 1-1: 3回以上歯を磨く (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-2: 7時間以上睡眠をとる (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-3: 休養をとる (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-4: 運動 (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-5: バランスのよい食事 (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-6: 食事は薄味にする (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-7: 朝必ず排便する (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

Q 1-8: 家庭学習をする (よい習慣ができている (Yes), できていない (No))

(食生活について)

Q 2-1: 魚を週3回以上食べている (Yes, No)

Q 2-2: 豆類を週3回以上食べている (Yes, No)

Q 2-3: 色の濃い野菜をほぼ毎日食べている (Yes, No)

Q 2-4: 色の薄い野菜をほぼ毎日食べている (Yes, No)

Q 2-5: 牛乳を毎日1本以上飲んでいる (Yes, No)

Q 2-6: インスタント食品を週1回以上食べている (Yes, No)

Q 2-7: おやつをほぼ毎日食べている (Yes, No)

Q 2-8: ジュース, コーラを週3回以上飲んでいる (Yes, No)

(日常生活に対する満足度について)

Q 3-1: 家庭について (満足している

(Yes), 満足していない (No))

Q 3-2: 交友関係について (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-3: お金に関する事 (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-4: 余暇の利用について (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-5: 社会参加について (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-6: 学習について (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-7: 性に関する事 (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-8: 周囲の自然環境 (満足している (Yes), 満足していない (No))

Q 3-9: 生活全般について (満足している (Yes), 満足していない (No))

III. 比較項目の選択

回収された質問紙の総数は970 (都市: 232, 農山村: 738)であったが, 記入漏れや明らかな誤記入のある標本のデータクリーニングを行い, 結果として残った851 (都市: 208, 農山村: 643) の標本を分析に供することにした。

都市・農山村間の比較に際しては, 最もナイーブな方法であるクロス集計を採用したが, すべての集計結果を提示することは紙幅が許さないので, 都市・農山村間で回答に差異が確認された設問についてのみ以下では提示することにする。

都市・農山村間での差異の確認方法として, 同種の問題に対し従来は χ^2 乗検定など統計的仮説検定の方法が用いられてきたが, 有意水準の設定に伴うあいまいさ等が存在するた

表1 都市・農山村間差異に関するAICの計算結果

モデル	対数尤度	AIC	モデル	対数尤度	AIC		
Q1-1	独立 従属	-1017.89 -1010.43	2039.77 2026.85	Q2-6	独立 従属	-1057.35 -1054.80	2118.71 2115.60
Q1-2	独立 従属	-1031.93 -1029.56	2067.86 2065.13	Q2-7	独立 従属	-1049.66 -1043.41	2103.32 2092.82
Q1-3	独立 従属	-1019.87 -1017.20	2043.75 2040.40	Q2-8	独立 従属	-1052.69 -1052.68	2109.38 2111.37
Q1-4	独立 従属	-1045.00 -1044.93	2094.01 2095.86	Q3-1	独立 従属	-1051.05 -1050.31	2106.11 2106.62
Q1-5	独立 従属	-1058.67 -1056.94	2121.34 2119.87	Q3-2	独立 従属	-1063.05 -1063.02	2130.11 2132.04
Q1-6	独立 従属	-1021.17 -1020.77	2046.34 2047.53	Q3-3	独立 従属	-898.82 -897.11	1801.65 1800.21
Q1-7	独立 従属	-1057.35 -1041.51	2118.71 2089.01	Q3-4	独立 従属	-826.59 -824.75	1657.18 1655.49
Q1-8	独立 従属	-1045.83 -1028.60	2095.66 2063.21	Q3-5	独立 従属	-679.75 -679.67	1363.51 1365.33
Q2-1	独立 従属	-1061.60 -1061.17	2127.19 2128.34	Q3-6	独立 従属	-677.09 -676.97	1358.18 1359.93
Q2-2	独立 従属	-993.70 -993.40	1991.39 1992.80	Q3-7	独立 従属	-791.20 -787.50	1586.41 1581.00
Q2-3	独立 従属	-1062.56 -1062.43	2129.12 2130.86	Q3-8	独立 従属	-995.37 -995.23	1994.74 1996.46
Q2-4	独立 従属	-1050.71 -1050.42	2105.42 2106.84	Q3-9	独立 従属	-933.71 -932.63	1871.42 1871.27
Q2-5	独立 従属	-1059.27 -1059.05	2122.53 2124.10				

め、小稿ではその様なあいまいさを一切含まない赤池の情報量規準(坂元・石黒・北川(1983), 坂元(1985), 鈴木(1995)など、以下AICと略記)を採用することにした。

手順としては「都市・農山村間で差異が存在しない」と仮定する独立モデルのAICと、「都市・農山村間で差異が存在する」と仮定する従属モデルのAICを計算し(表1), 後者が前者を下回った場合に都市・農山村間で回答に差異が存在すると判断した。結果として選択された設問項目は、Q1-1, Q1-2,

Q1-3, Q1-5, Q1-7, Q1-8, Q2-6, Q2-7, Q3-3, Q3-4, Q3-7, Q3-9である。「生活習慣」の多くで差異が確認されたのに対し、「食生活」についてはほとんど差異が認められない点の特徴として指摘できる。

IV. 都市・農山村別の集計結果

選択された設問項目についてクロス集計結果の図示を行った。紙幅の制約から、クロス

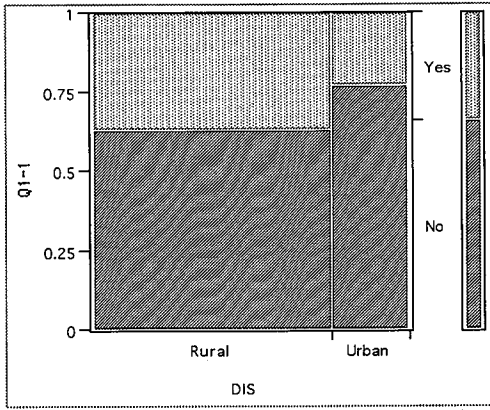


図1-a 「3回以上歯を磨く」(Q1-1)

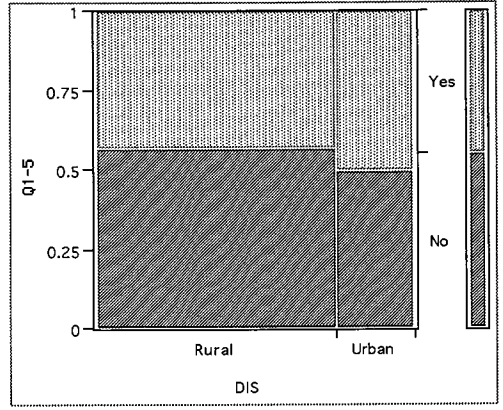


図1-d 「バランスのよい食事」(Q1-5)

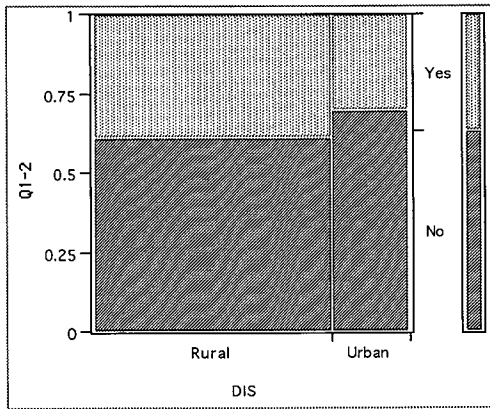


図1-b 「7時間以上睡眠をとる」(Q1-2)

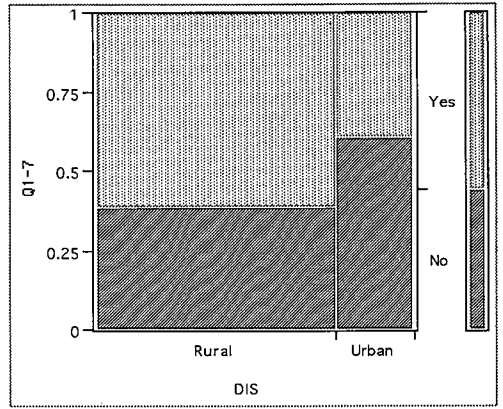


図1-e 「朝必ず排便する」(Q1-7)

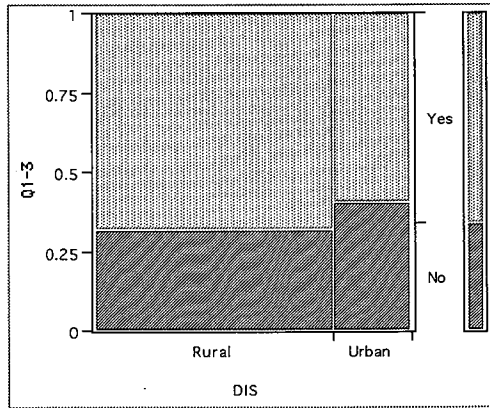


図1-c 「休養をとる」(Q1-3)

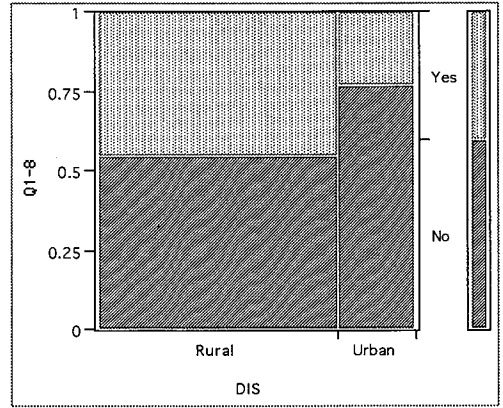


図1-f 「家庭学習をする」(Q1-8)

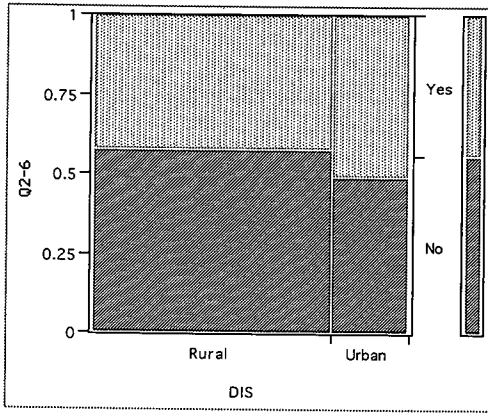


図1-g 「インスタント食品を週1回以上食べている」 (Q2-6)

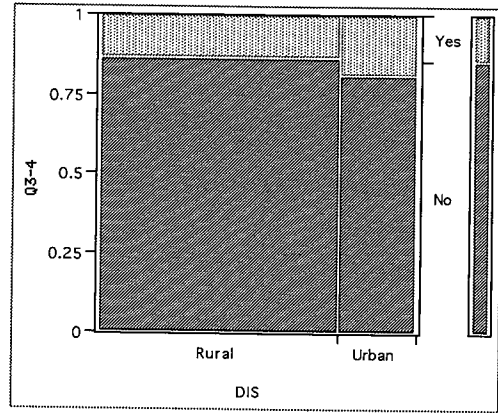


図1-j 「余暇の利用について」 (Q3-4)

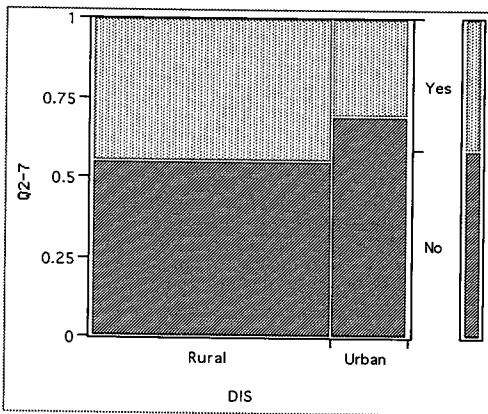


図1-h 「おやつをほぼ毎日食べている」 (Q2-7)

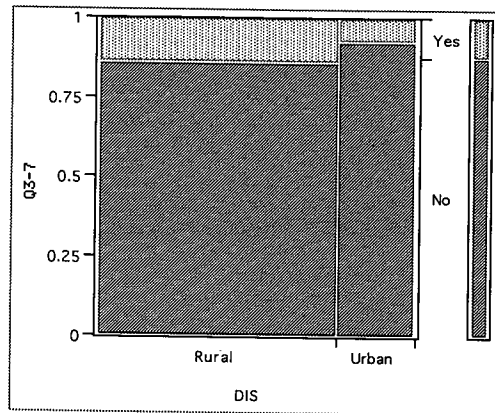


図1-k 「性に関すること」 (Q3-7)

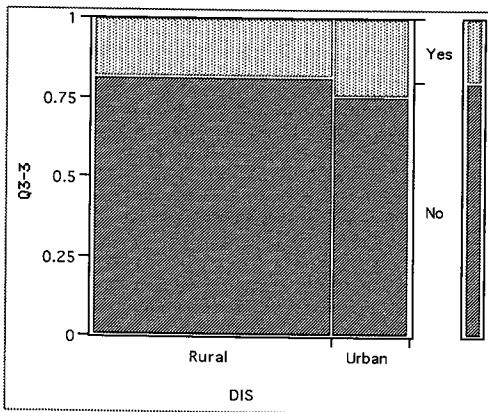


図1-i 「お金に関すること」 (Q3-3)

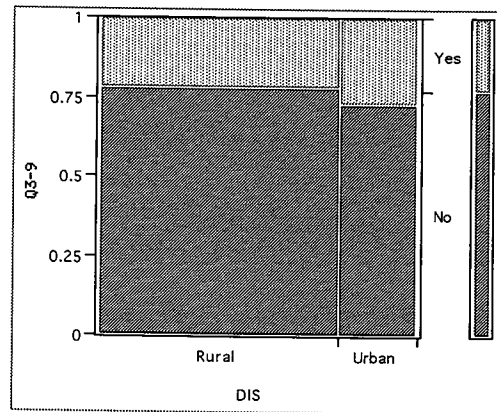


図1-l 「生活全般について」 (Q3-9)

表自体の提示は略し、相対度数については本文中で可能な限り補足することにしたい。

(生活習慣について)

Q 1-3: 3回以上歯を磨く(図1-a)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が33.9%、都市が23.1%、農山村が37.3%である。全体に歯磨に関してよい習慣をもっていると自覚している高校生の数は少ないが、農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が大きい。

Q 1-2: 7時間以上睡眠をとる(図1-b)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が36.6%、都市が30.3%、農山村が38.6%である。全体に睡眠をよくとっていると自覚している高校生の数は少ないが、農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が大きい。

Q 1-3: 休養をとる(図1-c)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が65.8%であり、都市が59.1%、農山村が68.0%である。全体に休養をよくとっていると自覚している高校生の数は過半数を超えているが、特に農山村の高校生は都市に比較してその割合が大きい。

Q 1-5: バランスのよい食事(図1-d)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が44.9%、都市が50.5%、農山村が43.1%である。全体に半数近くの高校生がバランスのよい食事をとっていると自覚していることになるが、農山村の高校生は都市の高校生に比較してその割合が小さい。

Q 1-7: 朝必ず排便する(図1-e)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が55.8%であり、都市が38.9%、農山村が61.3%である。全体に排便

に関してよい習慣をもっていると自覚している高校生の数は過半数を超えているが、特に過半数を大幅に割り込んでいる都市の高校生に比較して農山村の高校生はその割合が大きい。

Q 1-8: 家庭学習をする(図1-f)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が40.0%、都市が23.1%、農山村が45.4%である。全体に半数近くの高校生が家庭学習に関してよい習慣をもっていると自覚しているが、農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が大きい。

(食生活について)

Q 2-6: インスタント食品を週1回以上食べている(図1-g)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が44.2%、都市が51.0%、農山村が42.0%である。全体に半数近くの高校生がインスタント食品を週1回以上口にしていることになるが、農山村の高校生は都市の高校生に比較してその割合が小さい。

Q 2-7: おやつをほぼ毎日食べている(図1-h)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が41.1%、都市が30.8%、農山村が44.5%である。全体に半数近くの高校生がおやつをほぼ毎日口にしていることになるが、農山村の高校生は都市の高校生に比較してその割合が大きい。

(日常生活に対する満足度について)

Q 3-3: お金に関すること(図1-i)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が20.0%、都市が24.5%、農山村が18.5%である。全体にお金に関して満足している高校生の数は少ないが、特に農山村の高校生の方が都市の高校生に比較して

その割合が小さい。

Q 3-4：余暇の利用について(図1-j)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が14.6%、都市が18.8%、農山村が13.2%である。全体に余暇に関して満足している高校生の数は少ないが、特に農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が小さい。

Q 3-7：性に関すること(図1-k)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が12.3%、都市が7.2%、農山村が14.0%である。全体に性に関して満足している高校生の数は少ないが、特に農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が大きい。

Q 3-9：生活全般について(図1-l)

この設問についてYesと回答した者の相対度数は、標本全体が23.2%、都市が26.9%、農山村が21.9%である。全体に生活全般に関して満足している高校生の数は少ないが、特

に農山村の高校生の方が都市の高校生に比較してその割合が小さい。

V. 比較項目間の相関構造

以上の各設問項目毎の比較自体はそれほど意味があることではない。むしろ、各設問によって測られる「生活習慣」なり「生活満足度」は、背後に存在する「生活様式」の一端を示すものであり、この「生活様式」そのものこそ比較の対象とされるべきであろう。この点について検討するために、比較項目間の相関構造を明らかにしたい。

まず、比較項目すべての組み合わせについてクロス表を作成し、先に都市・農山村間の差異の存在を確認したのと同様に、独立モデルのAICと従属モデルのAICを計算し、その大小によって相関関係の存在を判定した。結果は図2である。

同図では農山村の方がYesと回答した者の

Q1-2											
Q1-3		○									
Q1-5	○	○	○								
Q1-7		○	○	○							
Q1-8	○		○	○	○						
Q2-6							△				
Q2-7					△			○			
Q3-3	○			○		○	△				
Q3-4	○	○	○	○					○	○	
Q3-7		○		○	○					○	○
Q3-9		○	○	○		○	△		○	○	○
	Q1-1	Q1-2	Q1-3	Q1-5	Q1-7	Q1-8	Q2-6	Q2-7	Q3-3	Q3-4	Q3-7

図2 AICによる比較項目間の相関の判定結果

(○：正の相関あり，△：負の相関あり)

相対度数が大きい設問項目については太線で囲んでいる。また、判定結果についても、双方ともに農山村の方がYesと回答した者の相対度数が大きい設問項目については太線で囲んでいる。

同図によれば、Q1-1(「3回以上歯を磨く」とQ1-8(「家庭学習をする」)、Q1-2(「7時間以上睡眠をとる」とQ1-3(「休養をとる」)、Q1-2とQ1-7(「朝必ず排便する」)、Q1-2とQ3-7(「性に関すること」)、Q1-3とQ1-7、Q1-3とQ1-8は、農山村の方がYesと回答した者の相対度数が大きく、かつ両者に正の相関が認められることが判る。これらの結果は、農山村における「時間的ゆとり」を反映したものであることが推察された。

一方、Q1-5(「バランスのよい食事」とQ3-3(「お金に関すること」)、Q1-5とQ3-4(「余暇の利用について」)、Q1-5とQ3-9(「生活全般について」)、Q3-3とQ3-4、Q3-3とQ3-9、Q3-4とQ3-9は、都市の方がYesと回答した者の相対度数が大きく、かつ両者に正の相関が認められることが判る。これらの結果は都市における「物質的豊かさ」を反映したものであることが推察された。

VI. むすび

以上でみてきたように、都市・農山村間では「生活習慣」の多くで差異が確認されたのに対し、「食生活」についてはほとんど差異が認められなかった。また、「生活満足度」については、ほぼ半数の設問項目について都市・農山村間で差異が認められた。

「生活習慣」については農山村の高校生の

方が都市の高校生に比較してよい習慣ができている(と自覚している)と言えそうであるが、これは本文中でも述べたように、農山村における「時間的ゆとり」を反映したものであると考えられる。

「生活満足度」については都市の高校生の方が農山村の高校生に比較して高い満足度を示す傾向があると言える。これはやはり本文中でも述べたように、都市における「物質的豊かさ」を反映したものであると考えられる。

また、周囲の自然環境に対する評価(Q3-8)に都市・農山村間で差異が確認できなかったことはやや意外であったが、都市の高校生は自然環境の「希少性」ゆえに、その重要性を知覚しており、それが結果に反映したとも考えられる。逆に言えば、農山村の高校生は自らの育った環境の「よさ」に気付いていないとも考えられるのである。

なお、小稿が対象としたような特定の高校の高校生は、学力等を基準にして有意抽出された集団であるため、各地域を代表する標本とは現実には見なしえない(例えば、小稿で示された差異は「校風」の差異かも知れない)。従って、強い結論は慎むべきであるが、それでも、農山村の高校生の「生態」の一端を小稿では示しえたと考える。

引用文献及び参考文献

- 渡部晴基・藤岡光夫・大森賢一(1993)「若者の定住意識に関する研究」『山陰地域研究』第9号, pp.188-189.
- 山根洋右ほか(1994)『農村におけるライフスタイルの分析とヘルスプロモーション技法の開発に関する研究』平成5年度厚生科学研究費事業報告書, pp.12-19.

坂元慶行・石黒真木夫・北川源四郎（1983）

『情報量統計学』共立出版，pp.92-96.

坂元慶行（1985）『カテゴリーカルデータのモデル分析』共立出版，pp.16-21.

鈴木義一郎（1995）『情報量規準による統計解析入門』講談社サイエンティフィック，pp.81-85.

